これまでの研究のまとめ

２０１６．１２．２７

大草

＜目次＞

１．仏教とコンプライアンス

1.1日本人のコンプライアンス意識

1.2仏教の倫理とは

1.2.1仏教の五戒、十善戒

　 1.2.2仏教典

　 1.2.3往生要集

　1.2.4正法眼蔵随聞記講話

　 1.2.5目に見えない世界

　 1.2.6禅宗

　 1.2.7神道のあの世

　 1.2.8神と仏

　 1.2.9キリスト教関連

　 1.2.10日本文化

２．不正が起きる原因について

３．現代社会と道徳・倫理について

3.1道徳と倫理

3.2なぜ、人を殺してはいけないか

４．まとめ

＜はじめに＞

　現代日本人のコンプライアンス意識に対して、仏教が相当の影響を与えていると思われる。仏教が日本人に対して、何をどのように影響を与えてきたのか、そしてそれが現代日本人のコンプライアンス意識として具体的な行動にどのような影響を与えているのかを個別に考察するのがこの項の目的である。

このような仏教とコンプライアンスに関する考察は、これまでの文献にはあまり例がなく、新しい試みといえるのではないかと考えている。

現代の日本人で自分が仏教徒である、又は仏教を信じているという人は約８４７０万人というデータ（総務省2013年第63回日本統計年鑑）がある。さらに、ブリタニカ国際年鑑2013年版によると、日本では９９％の仏教信仰率であるとの統計もある。しかし、宗教は何かと聞かれて仏教と回答する日本人は約３０％であるとの話もあり、正確なところは不明である。現代の日本人は、特定の信仰宗教と宗教観を持っておらず、仏教を信じていないという人も相当多いように見受けられる。

しかし、多くの日本人にとって仏教と何らかの関係があり、多かれ少なかれ何らかの影響を受けていると考えられている。

最近では、いじめにより自殺した若年者が、親友に自殺直前に「向こうの世界で待っている」というような内容のメールを出していたと聞いた。これは、若年層であってもあの世の存在を漠然とかも知れないが信じている証拠といえる。少なくとも、あの世の存在を意識しているということができると思われる。また、無宗教という人も、神社仏閣に行くと賽銭を投げ入れ、両手を合わせて参拝することが多い。なぜであろうか。これは、もともと日本人が何事に関しても寛容であり、信仰についても寛容なために、宗教の種類や宗派に関わらず、自然と参拝する行動にでるものと思われるのである。

一方で、キリスト教、イスラム教などの信仰者は、日本人のようには寛容ではない。他宗や異端者には大変厳しく非寛容である。この非寛容により、宗教戦争がこれまでも頻繁に繰り返されてきた。南仏の田舎町トウールーズでは、1560年にカトリックとプロテスタントの間で血みどろの抗争があり、カトリック教徒が４千人ものプロテスタントを殺戮しこの抗争に勝利した。毎年、カトリック教徒は、大量殺戮日を解放記念日としてお祭りを開いていたとの話である。1762年、ジャン・カラス事件が起き、プロテスタントの父親が息子のカトリックへの改宗を阻止するために殺害したとされた。父親のジャン・カラスは車裂の刑で刑死した。この事件を知ったヴォルテールがその不当性を暴き、父親の無罪が証明された。この不当性を暴く中でヴォルテールは、日本は世界一寛容な国であると称賛し、フランスも宗教についてもっと寛容であるべきだと論じている。ヴォルテールに絶賛された日本人の寛容さが、現代の日本人のコンプライアンス意識に影響を与えているとも考えられる。

この項では、主として仏教が現代日本人のコンプライアンス意識に及ぼした影響を考察することとするが、キリスト教や神道及び日本文化が日本人のコンプライアンス意識に及ぼしたと思われる影響についても考察する。

次に、株式会社における不正が起きる原因を考察する。最後に、仏教などの宗教が道徳・倫理などの社会規範にどのような影響を及ぼし、現代日本人のコンプライアンス意識に関係してきているのかについて考察するものとする。

１．仏教とコンプライアンス

　　日本の治安の良さや道徳観・倫理観の高さは、世界トップレベルにあるといわれている。この面から推測できることは、日本人のコンプライアンス意識のレベルも世界的に見れば相当上位に位置づけられることである。一般的にコンプライアンス意識と称される項目について考察した上で、それらのコンプライアンス意識に対し、仏教などの宗教や日本文化がどのような影響を与えたのかを考察する。

1.1日本人のコンプライアンス意識

日本人のコンプライアンスの意識とは次のような意識と考えられる。

（１）法令等諸規則・企業倫理に違反しないこと

　　　これは、新聞等において、コンプライアンス=法令順守とされていることである。悪法かどうかに関係なく、兎に角、法令等の規則を遵守することが大前提となる。また、法令等で明文化されていなくとも、社会の構成員として当然守るべき道徳、倫理、企業倫理に従うことがコンプライアンスの精神である。

（２）社会の要請や期待に応えること。

　　　コンプライアンスの精神は、単に法令等に違反しないというだけでは足りず、

　　社会の要請や期待に応えることが必要となる。企業のステークホルダーといわれ

　　る顧客や取引先、株主、消費者などの要請や期待に応えていくことがその企業の

社会的責任であると同時に永続的な発展に必要不可欠な要素となっている。

（３）公共の福祉に叶い、正しい行動をすること。

　　　株式会社の目的は、利益を生むことであるが、利益追求だけしていてよいとい

うものではない。社会からその存在意義を認めてもらうためには、企業活動を

通じて公共の福祉に貢献する必要がある。また同時に企業活動は、フェアーな精

神で正しく行動することが社会から求められている。

（４）天に向かって恥ずかしくないこと。

　　　人の行動は、お天道様が見ていると時々いわれるが、天に向かっても、家族

　　に向かっても恥ずかしくない行動をすることが社会から求められている。

（５）人間の尊厳と品性を重んじること。

　　　人の諸活動には、人間としての尊厳や品性を重んじることが求められ

ている。相手の人間としての尊厳を犯すような差別や相手の品性を冒瀆するような言動は避けなければならない。もしそのような言動があれば、社会から厳しく糾弾されることになる。

（６）金と正義が敵対するときは、正義をとること。

　　　人が様々な活動をするときに、しばしば利益追求と正義が相反することがあ

る。例えば、企業が不良品を回収するような必要性が発生したときに回収費用が

莫大になるために回収しなかったり、回収を遅らせたりするような場合、企業は

コストに関わらず速やかに回収することが求められる。回収しなかったり回収が

遅れた場合は、社会から強く非難される。人命に関わるような欠陥のある場合は

特にそうである。

（７）環境変化へ対応しコンプライアンス意識を変えていくこと。

　　　企業をとりまく社会の環境は、常に一定であるとは限らない。むしろ、外

　　部の環境変化はめまぐるしいものがあり、絶えず変化している。昨日まで、合法

的で問題とされなかったことも、今日は違法となり問題となるケースも増えてき

ている。外部の環境変化に適切に対処していくことが求められている。このため

環境変化に適切に対処していきたいとの意識も芽生えてきている。

1.2仏教の倫理とは

　　仏教の伝来（５３８年又は５５２年とされている）から平安末期までは国家鎮守の

ための貴族の宗教であったが、平安末期に庶民救済の仏教として爆発的に広まった。

釈迦の教えを説く仏教の宗派は違っても、基本となる教典は共通であり、仏教の教義

が長い年月をかけて日本人の意識の中に受け継がれてきたものである。

1.2.1仏教の五戒、十善戒

　仏教には、五戒と十善戒があり、釈迦の教えとして守るべき規律がある。実際に守られてない戒律もあるが、どの宗派も概ねこの戒律に準拠している。

（１）五戒

　　　・不殺生、不偸盗、不邪淫、不妄語（ウソ）、不飲酒

（２）十善戒

　　　・不殺生、不偸盗、不邪淫、不妄語、不悪口、不両舌(２枚舌)、不綺語（戯言）、　無貪、無瞋（怒り）、正見（邪見にふけらないこと）

　1.2.2仏教典

　　　原始仏典と大乗仏典の二つがある。

・原始仏教には、パーリ五部及び漢語訳の阿含経典群がある。釈尊の言葉を比較的忠実に伝えているといわれる。

・大乗仏典には、般若経、維摩経、華厳経、法華三部経、浄土三部経、金剛頂経などがある。西暦０年頃に大乗仏教団によりサンスクリット語で編纂され、その後漢語に訳された。

・経、律、論、注釈書などは大蔵経または一切経と呼ばれている。

　1.2.3往生要集

　　「往生要集」より。

　　（１）．極楽浄土

極楽浄土とは、どんなところか概観すると以下のような素晴らしい場所のようである（番号は、小生が便宜的につけたもの）。

①．美を極め、妙を尽くしているところ

②．全ての色が清浄で美しい

③．聞く声がことごとく悟りの声

④．瑠璃を地とし、黄金の縄で道の境をつけ、平坦でひろびろしている

⑤．はればれとした輝きがあり、微妙に麗しく清らか

⑥．なんとも言えない美しい様々な衣を地面一杯に敷きつめ人も天人もこれを踏んで

　　行く

（２）．宮殿について

①七つの宝で作った宮殿や楼閣が五百億ある

②宝で飾られた寝床や座には美しい衣を敷いてある。七重の欄楯（てすり）や百億の華の幢（はた）には珠の飾りが垂れ宝玉づくりの幡（のぼり）や蓋（かさ）がかかっている。

③宮殿のうちや楼閣のうえには、天人がいつも伎楽をかなで如来をたたえて歌をうた

っている

（以下省略　３．池、４．階段、５．仏の教え、６．喜び、７．逍遥、８．河、９．樹々のすがた、　１０．大空のすがた）

（１１）．浄土

美しい香や塗香・抹香などの多くの香りが浄土に満ちており、それを嗅ぐと煩悩もおこらない。地上より大空まで、宮殿の華も樹も計り知れない。食べたいときは七つの宝でできた机があらわれ、七つの宝でつくられた食器においしい食べ物が一杯入っている。その美味しさはこの世と違い、また天上の味とも違う。香りのよさはたとえようがなく味かげんは思いのままである。

色を見、香りをかいで、身も心も清浄になり、食べ終わると同時に力がみなぎる。食事を終えると消えてなくなり、時がくるとまたあらわれる。浄土に生まれた人は衣服がほしいと思うと思い通りにすぐ得られる。ここでは、光があまねくいきわたり、日や月や燈火がいらないし、冷たさと暖かさもほどよく調和し、春夏秋冬の差もない。

（略）そよ風にあたると、心地よい喜びをいだきこころの全てのはたらきが尽きてしまった三昧の境地を得たようになる。

（略）数限りない仏の国のなかで、極楽世界に備わっている功徳がもっとも勝れる。二百十億の仏の浄土の厳かに清浄な勝れる点がみなこのなかに収められているからである。極めて重い罪業でも除かれ、生命の終わったあとはかならずこの国に生まれる。

このような極楽浄土に行くための方法が「往生要集」に書かれている。

　1.2.4正法眼蔵随聞記講話

　　この本は、道元の弟子懐奘が道元の教えを分かりやすく書いた「正法眼蔵随聞記」の解説書。

①無所得の修行

学道の人（真理を学ぶ人）は、自分のため（立身出世、自己救済、悟りを得るためなど）に仏法を学んではいけない。道元は自分のために学道や修行をすることを拒否した。道元は、仏法修業は、何ものかを得るために行うのではなく、真理のため仏法のために行うものであるとし、無所得の修行を堅持した。（真理と仏法の前では、自分は無でなければならない。真理を体現した自己が尊いのではなく、自己に体現せられた真理が尊いのである。仏法は人生のためのものでなく、人生が仏法のためにあるのである。）

②行雲流水の如し

貧にして貪らざる時は先ず此の難を免れて安楽自在なり。学道の人は貧でなければならない。財があれば、守ったり、取られまいとして心が乱れ、財をめぐって争いが起こる。財がなければ、心が乱れることもなく、争いも起こらない。僧とは、雲のように一定の住所もなく水のように流れてよるべき場所持たないのが僧である。

③おのれの分を知れ

修行において一番大切なことは、我執を捨てて知識の教えに随うことである。仏教では人間の欲望を三毒という。貪り、瞋（いか）り、痴（おろか）さの三つが、人間の心をダメにする。三毒のなかで最も強い煩悩が貪りの心である。金でも地位でもあればあるほどもっと欲しくなる。貪欲の強い者は生きながらにして餓鬼道に落ちると説く。足りるを知れ。知足の人は貧しと雖もしかも富めり。自分のたけ分にあわせて生きるのがよい。

（花は半開きを看、酒は微酔に飲む・・・菜根譚）

④惜陰を知る

人は少年や壮年のときは、時間を惜しむことを知らない。年を取ってから初めて光陰を惜しむことを知る。50歳、60歳を過ぎれば、いつ死ぬか分からぬとなれば、一瞬一瞬に生命を賭けるようになる。世間の付き合いは止むを得ないかも知れないが互いに相手の時間を盗んでいるのである。（他人の時間を盗むことは最大の盗みである。）人生は短く、時の流れは速い。何か一事をなさんと志すならば、無用な交際と無駄な時間の空費は極力避けねばならぬ。

⑤病と修行

たとひ発病して死すべくとも、猶只是を修すべし。病ひ無ふして修せず、この身をいたはり用いてなんの用ぞ。病して死せば本意なり。

⑥一事を永続するは難し

「無常迅速　生死事大」、無常の道理を考えるなら、只今一瞬一瞬を大切にしなければならない。「今日の発句は今日の辞世、今日の発句は明日の辞世、我れ生涯言い捨てし句に一句として辞世ならざるはなし」（松尾芭蕉）。何かやろうというのが発心で、発心したらやり遂げると決心し、継続していかなければならない。

参考）脇愚山（三浦梅園の弟子）の同約５条

一．学問の本は身をおさむるに在り、心つつしみを忘れず、身、礼儀を怠らざるべき事。

一．学問の要は人倫をあきらかにするにあり、各々の道に従いて違えざる事。

一．学問の道は知ると行うにあり、必ずよく知り、よく行うべき事。

一．経書を第一とし、その次は史、その次は諸子百家雑書たるべき事。

一．文章は我言を立て意を達するの用なり。詩は我情を詠じ、興を寄する具なり、余力を以てつとめはげむ事。

　1.2.5目に見えない世界

　　　「日本文化を読みなおす」（大隈和雄）より、引用して、目に見えない世界とこの世の関係について以下の通り考察する。

①人は生涯を終ると、眼に見えない世界に行くと考えられるが、眼に見えない世界に行った人間の霊はしばしばこの世に戻る。しかし、その往復は年月が経つと希薄になりやがて消える。

②眼に見えない世界に行った人間の霊は、特段の事がない限り、その世界に鎮まっている。霊はこの世の他の生き物になることはない。また、この霊は、女性の胎内に宿り、二度三度とこの世に産れることはないと考えられている。

③眼に見えない世界には、神や仏・菩薩が既にいる。普通の人の霊は簡単に神や仏になることはない。人の霊は、神や仏と別ものと考えられる。

④眼に見ない世界に存在するものは、この世の人間に対し託宣をつたえたり、この世に出て来ることがあると考えられている。神や仏・菩薩が人間の姿をとりこの世に現れる場合、何らかの予兆を行って人間の女性の胎内に宿るが、特に人間の側からの働きかけが強いと申し子という形をとる場合がある。そうしたものは、この世に出てくる目的を達すると元の姿にかえる。

⑤仏教が広まると、仏の国に生れることを願う人々が多くなり、人間の霊も神仏に近いものとなると考えられるようになり、死後の世界について様々な教えが説かれるようになった。

⑥天皇も輪廻の中にあり、仏教の理法の中にあると考えうる。天皇も仏教の理法に従い地獄に落ちるとしたら、地上でその天皇を救う方法は仏教にしかないだろう。

　　このように因果と輪廻の思想は極めて難しいものだったが、その思想は日本人の世界観や宗教意識に大きな影響を与えたと考えられている。

　1.2.6禅宗

　　　仏教の宗派である禅宗も日本人のコンプライアンス意識に大きな影響を与えていると考えられる。曹洞宗と臨済宗の違いについて、「法事・法要・四十九日がよくわかるＨＰ」から以下引用する。

　　＜禅問答を行う臨済宗＞

禅宗といえば、すぐに「座禅」を思い浮かべるほど、日本で定着しています。  
禅宗には大きく臨済宗と曹洞宗の二大宗派があり、共通している部分と異なる部分があります。共通の部分は座禅で悟りを開くことと、師から弟子へと教えが伝わることを重要視している点です。  
異なる点は法灯（師匠から弟子への系譜）と「座禅」の仕方などが違います。禅を行うとき、臨済宗は通路に向かって座り、「看話(かんな)禅(ぜん)」といって、師匠によって与えられた問題「公案」に弟子は身体全体で取り組み、悟りを開くというものです。  
「公案」とは「禅問答」のことで、いまではむずかしい問答、訳のわからない問答といった意味に使われていますが、悟りにいたる重要な課題として「公案」を使っています。  
禅宗はインドの達磨によって５２０年、中国に伝えられました。ダルマは開運の縁起物として知られていますが、それは達磨が中国河南省少林寺で面壁９年の修行を行ったところからきています。壁に向かって９年間座禅を組んだため、足が腐って無くなってしまったため、ダルマには足がないのです。  
達磨から１１代目の臨済義玄が臨済宗を開きました。宋に留学した栄西禅師が１２０４年、京都に建仁寺を建立してから、日本に臨済宗が伝わります。しかし、京都は天台宗が力を持っていたので、なかなか広まりませんでした。  
禅宗を広めたのは、中国から来た僧が１２４８年、鎌倉幕府の執権、北条時頼の全面的な支援を受けてからです。鎌倉に建長寺を建てて、禅堂での日常規範を定め、禅寺の基盤をつくりました。  
１２７９年、北条時宗に招かれてきた中国の僧は、蒙古との戦いで命を落とした武士の追善供養のために円覚寺を建てました。次々と禅宗のお寺が建てられた当時の北鎌倉はまるで中国街のようだったそうです。建長寺と円覚寺は現在にいたるまで、禅の道場として有名です。  
臨済宗は師から弟子へと伝えていくことを重んじますので、それぞれの寺院が独自の流派をもっています。妙心寺（京都市）、建長寺（鎌倉市）、円覚寺（鎌倉市）、南禅寺（京都市）などが臨済宗として有名な寺院です。  
本尊は釈迦如来です。  
特定の経典は定めていませんが、教化には金剛般若経、観音経、般若心経、大悲呪、座禅和讃などを用いています。  
「南無釈迦牟尼仏(なむしゃかむにぶつ)」と唱えます。

　　＜ひたすら座禅をとく曹洞宗＞

臨済宗と曹洞宗の一番の違いは座禅の仕方です。曹洞宗では壁に向かって座って、座禅をします。「黙照禅(もくしょうぜん)」といって、ただひたすら座禅に徹する、つまり「只管打坐(しかんたざ)」することをそのまま悟りとする教えです。  
この教えを広めたのが高祖・承陽大師道元です。８歳で出家後、１２歳で比叡山に入り、天台座主、公円のもとで出家します。その後、禅宗の建仁寺で、栄西の高弟、明全に師事し、２３歳のとき、明全とともに宋に留学するのです。  
中国で臨済宗が上流社会と交流するのに疑問を感じた道元は、ただひたすら座禅に徹する曹洞禅を学んで５年後に、明全の遺骨とともに帰国します。  
俗塵を嫌った道元は、雪深い福井に永平寺を建てます。一時、北条時頼の招きで鎌倉に移りますが、すぐに永平寺に戻って隠棲し、出家至上主義をつらぬいて、５４歳の生涯を閉じました。  
道元から４代目にあたる太祖・常済大師瑩山(けいざん)がその後、大衆教化につとめ、現在、日本最大の寺院数を誇る巨大教団となっています。  
曹洞宗では道元を宗派の父、瑩山を母にたとえ、両祖を宗祖と仰いでいます。本山は永平寺（１２４４年創建）と総持寺（横浜市）です。  
本尊は釈迦如来です(臨済宗も同じ)。  
経典として用いるのは、法華経、金剛経、般若心経などと、道元が著した正法眼蔵です。  
「南無釈迦牟尼仏(なむしゃかむにぶつ)」と唱えます（臨済宗も同じ）。

　1.2.7神道のあの世

　　＜神道におけるあの世とは。＞

神道における人間の死後の世界観は、諸説あるが、次のように神になるとする説が有力と思われる。

・死者は、霊魂に戻り、神となって自分の子孫を見守る。

・日の本に生まれ出でしに益人は、神より出でて神になるなり』（中西直方：江戸時代の伊勢神宮の神職）

・霊魂（精霊）が、生まれた赤子の体内に入って人間になる。肉体が滅んでも、霊魂は肉体を出て永遠に生きる。

・先祖の霊魂は、人々の住む「村」の近くや原野にいて子孫を見守る。そして先祖の霊魂は景色のよい山を好むとされるために、「村」を見下す形のよい山が神様の住む山とされた。

・人は死ぬと霊魂が肉体を抜け神となり、常世国や高天原や人々の住む村落や海岸にいる。

　1.2.8神と仏

　＜「神と仏」山折哲雄から。この本は神と仏の関係が平易に説明されており面白い。＞

・日本で最初の焼身行。紀州那智の僧、応照は、時期が熟したとき、紙で作った法衣を着て手に香炉をとった。そして高く積み上げた薪の上に登って結跏趺坐し、西方に向かって諸仏を勧請し、こう言った。

「自分は心と体をもって妙法蓮華経に供養し、頭頂をもって上方の一切の諸仏に献じ、両足をもって下方の世尊に奉献する。背をもって東方の一切の諸仏に献じ、胸をもって釈迦に献じ、左右の脇をもって多宝世尊に施し、咽喉をもって阿弥陀如来に奉る。五臓をもって五智如来に献じ、六腑をもって六道の衆生に与えよう。こうしてすみやかに菩提をえたい。」

こう言い終わってから、彼は自分で薪に火をつけ、手に定印を結び、口に法華経を誦したという。修行僧も行き過ぎると、死を恐れず死を乗り越えて（死を意識しないで）即身成仏することを実践する者がでた。

(略)

入定はありえても、入寂という事態はあるべきではない。即身成仏した行の主体はどのようなことがあっても現実的な死の領域に足を踏み入れてはならない。

（略）

つまり、火生三昧による即身成仏の考えには、生の側から死の世界を想像する思考枠が欠如している。死の世界を生の延長として、そこに永生の極楽を想像するような感覚が欠けているのである。（大草：死なないで、生を継続していると理解するということか？）

(略)

こうして、真言行者における入我我入型の修行は、生体を聖体に合致させることによって、死の観念を徹底的に排除している。その点で法華行者における修行の型とは対立していると言えるであろう。

（略）

源信は大和の人で幼くして非凡の資質をあらわした。横川の秘境に籠って激しい修行に打ち込んだ。阿弥陀仏を無量遍となえ、法華経を一千部、般若経を三千巻、阿弥陀経を一万巻読誦し、さらに阿弥陀仏大呪を百万遍、陀羅尼を七十万遍、尊勝陀羅尼を三十万遍念じたという。しかし、源信は満足を得ることができなかった。

やがて、源信は、阿弥陀仏の仏号を称する念仏のみがすぐれているとの回心体験をえた。他の行を捨てて、もっぱら往生を願い、その常住坐臥の全てを極楽往生のためにのみ方向づけた。1017年、臨終を迎えた源信は、沐浴して身体の垢を洗い落とし、仏の手にかけられた糸をしっかり握り、頭北面西して念仏を唱えた。最後は眠るように息が絶えたという。

（略）

仏教における修行は、心身の鍛錬により、いかにして「仏」の境地に達することができるか、その可能性を追求した４種類の行がある。

１．法華経主義に立つ行

２．密教的な行

３．浄土教的な行

４．禅的な行

これらの行は、生体のコントロールを能動的・主体的に行う行為である。死の領域を意識的に拒否し、あるいは死と逆説的に交わり、あるいは死を生に変容させようとする行為であった。人間が仏と交わり、仏になろうとする試みは、人間と「神」との諸関係とは異なって、徹頭徹尾肉体という場面、生体という舞台において演じられるドラマであった。（観念的なもの、思想的なものではないという意味か？大草）神道的な世界観とは異なる仏教的な世界観の特質が見いだせるのではないか。

（略）

時代が降るにつれて、神信仰や仏信仰が次第に変質し、やがて希薄になっていったことは否めない。しかし、希薄になっても無神、無仏の闇にのみこまれることはないであろう。（略）

本書の思考枠

・第一章：見えるもの（仏）と見えないもの（神）

・第二章：媒介するもの（神）と体現するもの（仏）

・第四章：祟り（神）と鎮め（仏）

⇒神と仏は相互友好関係にあり、お互いに補完し合ってきたといえる。本地垂迹説がその根本にあり、神の側から大きな反論がないために均衡を保っている。日常生活でも、神仏を明確に分けず、初詣や合格祈願は神社へ、病気回復や先祖供養は寺院で行っている。知らず知らずのうちに神や仏の戒律が日本人のDNAに刷り込まれているように思われる。

　1.2.9キリスト教関連

　　「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」のサマリーは以下の通り。

　　　①資本主義の精神とは

　　・利益を得ること、所有することは善である。

　　・近代的資本主義とは合理的な産業経営的な資本主義をさす。

　　・世俗内的禁欲の思想あるいは天職義務という思想は、プロテスタントの宗教意識に由来する。

②プロテスタンティズムの倫理

　　・利益を得ることはよくない。（カトリックでも同じ）

　　・世俗内的禁欲（勤労、節約、誠実、目標達成のための禁欲など）が奨励され、それらが社会的なエートス（習慣・慣習・心情）となった。　　　　　　　　　　　　⇒天職（絶対的な自己目的として取組む労働）という仕事の位置づけがなされた。

　　・長い間の宗教的教育の結果、天職に励むという心情が生じた。

　　・天職とは神の召命=神から与えられた使命。（資本主義を支える労働力の供給）

③結論

・世俗内的禁欲のエートスは、金儲けを承認し、倫理的義務へと変化した。

・伝統主義の精神から資本主義の精神へエートスの転換が行われた。

・結果として宗教を意識しないで、資本主義の精神が歩き始める。

　　＜アメリカと宗教（堀内一史）より。＞

☆スコープス裁判　1925年

テネシー州デイトン（当時人口1500人）の高校教師ジョン・Ｔ・スコープスが、州法に違反して、進化論を授業で教えた。スコープスは、逮捕され、訴訟の被告となった事件。

一審：有罪。100＄の罰金刑

州最高裁：一審判決を否認し、訴えの棄却を命じた

結論：勝敗がつかないまま放置。

1968年に「反進化法」が廃止となった。

裁判においての議論では、進化論者の勝利。反進化論者は、聖書の矛盾を合理的に説明できなかった。

☆大統領選では、以下のような政治と宗教が議論の焦点となった。

　　　進化論、同性婚、人工妊娠中絶、共産主義、無神論、公民権運動、人種差別、貧困格差

　1.2.10日本文化

　　＜「日本の文化をよみなおす」より抜粋。＞

・この世を厭離して浄土を欣求することを教える浄土教は、苦悩に満ちた穢土としての現世から、来世では理想の浄土へと生まれかわることを願うように勧め、往生のために有効な方法を様々に教えた。来世で極楽に生まれようとすれば、現世における自分のありかたがその因縁になることを考えねばならないし、現世において来世には極楽にうまれることができるような功徳を積もうとすれば、そうした善因縁を積むことができるかどうかは、現世の自分のありかたに関わっており、それは当然現世の自分をあらしめている前世の因縁にも関わってくることになるであろう。

⇒現世で功徳を積むと浄土に行くことができるという信仰があるが、現代人には、

このような考え方はないように思われる。

＜「日本人と日本文化」より＞

キーン：徳川時代に儒教が日本人のなかに案外ひろまって、現在でも相当根強いのでは。

　　　　日本の道徳は儒教的な道徳でしょう。現在先進国で犯罪率が毎年増えてないのは日本だけ。これは儒教の影響ではないか。

司馬　：僕はその意見にわりあい反対。日本は、江戸時代に各藩に儒学者が少数いるだけの儒教に留まっている。室町時代に、小笠原家が作った礼儀作法などのでがんじがらめにされただけで、儒教とは関係がない。一般人は、儒教の影響をほとんど受けてない。恥とかカッコ悪いとかの美意識が犯罪を抑制しており、犯罪率が増えない理由である。儒教とは関係ない。

キーン：日本人はどんな凶悪犯でも儒教的な言葉で謝罪する。社会又は世間に対する罪悪感がある。外国の場合は、犯行を否定し、謝罪はしない。世間の哲学は、儒学でしょう。儒教を学んでなくても近松の人形浄瑠璃を見て、儒学的なものをなんとなく自分の思想として吸収していたのではないか。

司馬　：分かりました。世間の基準みたいなのがあって、それに対して恥ずかしいと思うのだが、その基準が儒学的なものだと。

キーン：義理人情という言葉は、仏教でも神道でもなく、儒学的言葉である。近松の悲劇が義理人情ものであれば、その芝居を見た人は倫理的な思想を吸収したのではないか。

司馬　：儒教はあまり普及しておらず、日本人に対して影響しなかったのではないか。

キーン：儒教の影響は強かったし、現在も儒教の影響は相当強いと思う。

（二人の意見が違うが、私はキーンの意見に賛成である。）

キーン氏は、江戸時代に徳川体制を守るために儒教（仁義礼智信など）を取り入れ、その儒教的な思想が当時の日本人に相当広まっていたと見ている。

⇒　①仏教と儒教は日本人の精神の中に生きている。

②江戸時代の儒教思想が一般的な日本人の精神に根付いており、コンプライアンスの意識に通じるものがあるのではないか。

　　　＜「日本とは何か」司馬遼太郎：山折哲雄対談から＞

司馬：つまりどこかの山に入って谷間を見てそこに一種の美しさとか、懐かしさ（懐かしさというのは千年前の懐かしさというような懐かしさ）を感じたりするという精神の中に、日本人の宗教感覚が入っているわけですからね。

そういう割合いい感じの宗教感覚を生して世界にひとつの調和を与えるーというと少しおこがましいのですが、、、。私たちは非常にシャイな民族ですけれどもそういう調和を与える役割を担うということをやってみたらどうだろうか。

交通信号は文明である。逆に文化とは日本でいうと婦人が襖を開ける時、両膝をつき両手で開けるようなものである。立って開けてもよいという合理主義はここでは成立しない。不合理さこそ文化の発光物質なのである。同時に文化であるがために美しく感じられ、その美しさが来客に秩序についての安堵感をあたえ、自分自身にも魚巣にすむ魚のように安堵感をもたらす。ただスリランカの住宅に持ち込むわけにはいかない、だからこそ文化なのであるといえる。（司馬さんは、文化とは不合理なものであるがそこに美意識や安堵感があるものという）

山折：文明の規矩は、やはりそれぞれの因果に規定されてくりだされるのであろう。司馬遼太郎氏が「明治」国で見出したプロテスタンティズムに通じるような道徳的緊張が新渡戸稲造の「武士道」に描かれた無私の精神、武士ではないが庄屋階層の人々が伝えてきた「人のためにせよ」という精神がかつては存在した。司馬さんは「次の時代なんかもうこないという感じが僕なんかにはあるな。ここまで闇を作ってしまったら、日本列島という地面の上では人は住んでいくでしょうけれども、堅牢な社会を築くということは難しい。ここまでブヨついて緩んでしまったら、取り返しがつかない」とまで発言している。政治家、官僚、ディベロッパーが**明治人の倫理**を忘れて私利私欲の行動をするようになってしまった。明治の精神はすっかり衰弱してしまっている。

⇒日本人の精神は、明治人に代表されるような社会に奉仕する利他にあると言っても過言ではなかった。ところが、戦後の経済成長一本の国家路線により、よき明治人の精神が忘れられてきたといえる。とはいうものの、１９９５年の阪神淡路大震災、２０１１年の東日本大震災時の国民の秩序正しい行動や相互扶助の精神が発揮され、諸外国から道徳の高さを絶賛された。これは、公共優先の精神が未だに日本人の心に残っていることを事実として世に知らしめたといえる。これは、コンプライアンスに大きく貢献する道徳や倫理が脈々として生きている証拠といえる。

２．不正が起きる原因について

　　＜奥村宏「トップの暴走はなぜ止められないのか」より＞

・結論：トップの暴走を止めようとすると、その組織から自分が排除されてしまうので、これを恐れて、トップの暴走を知っても何も言わない、何もしないのである。

・会社制度の中では、トップは何でもできる上、会社は有限責任であり社会への無責任体制を保証しており、トップは暴走できる環境下にあると言える。

・奥村説：日本の株式会社の問題点

①大企業間での株式相互持合い（安定株主で相互に干渉しない関係を維持できる制度）

②株主主権の衰退（株主が自然人のほか法人にまで拡大されたことによる）

③経営者を厳罰に処する法律はあるが、株式会社そのもののあり方は問題にされない。

⇒不祥事を産み出す仕組みとなっている。

④株式会社の巨大化とその寿命が尽きていること。

⇒巨大化した株式会社は解体しなければよくならない。

＜なぜ企業不祥事は起こるのか」（ローレンスEミッチェル著）を読んで＞

標記の書物を読んで、刺激を受けた事項をアトランダムにメモしておく。

①．「会社の無責任」

・会社の法的な構造の中に問題がある。

・短期的な株主利益（株価）の最大化が経営目的となっている

②．「人は費用ではなく、資産だ」

・簡単に人の費用削減（リストラ）するものではなく、価値を産む源泉としての資産・財産である。

③．会社法における不正のトライアングル

・機会（責任有限・・無責任）、動機（短期の株主利益の追求）、正当性（合法）というトライアングルを保障する仕組みが会社法の仕組みに他ならない。

・会社法は、企業の無責任性を保障するものであり、企業に社会的責任を求めるものにはなっていない。

・短期的な株主利益の追求には、CSRやコンプライアンスは貢献しない。

・会社の目的からして、コンプライアンスを重視するインセンティブが働かない。

④．会社の有限責任は、蒸気機関より重要な発明だ！！株価最大化のコストを外部化した。

⑤．ステークホルダー間で相矛盾する要請がなされたとき、どういう考え方、基準でどう相矛盾する要請に応えるべきか。①社会倫理、②当社の理念（情報革命で人々を幸せに）、③大義の観点から、よりふさわしい要請を見出して、それに応えるべきか。どれか１ステークホルダーの要請を選択するのか、複数のステークホルダーの要請にウェイト付けして応えるのか、段階毎に分けて時間軸で応えていくのかなどどれを選択すべきか。

⑥．孫社長は、義と利が対立したら、義を採る。義と義が対立したら、大義を採ると言っている。

⑦．企業は、株主利益（株価）の最大化を目的とするものであり、それは有限責任によって守られている。この企業に、責任ある行動、道徳的な行動、説明責任は期待できない。

⑧．信頼はビジネス上の重要な財産であることは、心理学的な研究によっても裏付けられている。信頼の存在により、監督が大幅に削減されうる。

⑨．アメリカの株主利益の最大化の達成システムとしての組織。その組織における信頼の不足のため、監視主義のコストが増大する。ドイツや日本は、協力的な企業システムは、企業全体の信頼レベルが大幅に高い。（256頁）

⇒①．株主の有限責任のツケは、社会がかぶることになる。即ち、倒産した結果、支払いきれない負債は結果的に社会が負担することになる。このため、企業の活動は、最終的に責任をかぶってもらう社会に対し、責任を負っていると考えるべき。よって、好き勝手な企業活動は許されず、ＣＳＲ（コンプライアンスを含む）という概念が生じる。

②．アメリカの株主利益の最大化とそのための企業システムを支援する法律構造が、企業不祥事を発生させているという。支援する法律構造とは、何を指すのか。

ⅰ.有限責任と株式流動化

ⅱ.株主、取締役、取締役会などの権限を規定する商法。

ⅲ.人件費を経費とみなす会計と税金制度。人財として資産計上する会計制度にすべき。

③．企業の社会的責任

アメリカ企業は、法的に、経営者を短期的な業績達成へ走らせる構造となっている。このため、経営者は、責任と道徳観をもって行動する自由を制限されている。その結果が、不道徳な企業行動なのである。これが、不祥事を発生させる最大の原因という。

３．現代社会と道徳・倫理について

3.1道徳と倫理

　　＜島園進「日本仏教の社会倫理」から＞

島園進氏は、近代仏教学が仏教の倫理性を軽んじてきたがこれを改めるべきと主張する。

・A説：仏教からは、世俗社会と積極的に関わるような倫理性は出てこないとする。

・B説：大乗仏教で顕著な慈悲の理念を仏教の倫理性の基盤としようとする。（ただし、これを筋道立てて論ずる仏教学者は少ない。）

・島園氏主張：仏教の正法の理念を基軸におき、倫理性、社会性が大きな位置をもつものとする日本仏教理解を提示する。即ち、仏教には、本来、社会倫理的な実践が大きな要素として備わっていた。また、仏教学専門家の仏教理解と一般市民の仏教的思考や実践が大きく乖離してしまっている。

⇒仏教は、現代のコンプライアンスにも影響を与えていると考えられる。

　　＜「現代日本人の宗教」柳川啓一より＞

この本では、現代日本人の宗教意識について、以下のように主張されている。

・仏教の場合、信者が守らなければならない５つの戒律がある。

①殺生するな

②盗むな

③女性と交わるな

④嘘をつくな

⑤酒を飲むな

これらは、日本に入ってくると、それほど重要視されなくなる。

お坊さんには百幾つかの戒律がある。しかし、日本のお坊さんは家庭生活を営んでいる者が多いので、女性と交わるなという戒律に重きをおかなくなった。明治以降、妻帯は正式に認められるようになった。（親鸞の影響では？大草）

また、殺生するなとあるため肉食はできないはず。これも緩んで明治以降、公認された。

「盗むな」は仏教徒でなくても当然として、「酒を飲むな」というのは、昔から戒律だという意識すら見られない。お坊さんの中には酒好きが非常に多い。あまり度を越して酒を飲んではならないという意味に解釈されてきた。本来、戒律というのは、いついかなる場合・場所でも厳守しなければならないものである。この観点からすると、日本の場合は、常識的な宗教の概念からかなりズレている。

一般の日本人は教義という信じるものを持っていないと言える。また、寺、教会、神社の所属メンバーであるという意識が薄い。また、厳守すべき戒律を持っていない。このために、信仰を持っているかと聞かれると「宗教は持っていません」と答える場合が多くなると考えられる。特に現代日本人は宗教を持つことをなかなか認めようとしない人が多い。

・しかし信仰率が３５％と低いのは、必ずしも「非宗教家」とか「脱宗教家」の傾向によるものではない。明治以前から、同じような信仰率であったといえよう。

⇒宗教は、意識しないうちに、心のどこかに芽生えてきているものと思われる。宗教の意識は、社会、学校、家族などの環境下で自然に人が身につけてきたものではないだろうか。個人としての宗教がなくても親の代までの宗教はある人が多い。仏教形式での葬式が多いのはその表れと考えられる。

3.2なぜ、人を殺してはいけないか、を考える

最大の禁止事項である殺人がなぜいけないかについて考えてみたい。これは、倫理や道徳がどこから生じてくるのかを考察する上で役立つものと思う。

以下のような、いろいろな理由が考えられる。

①．自分がイヤなことは、他人もイヤなのでしてはならない。

②．人間に自然から与えられた種を守るという本能である。

③．人は一人ではなく共同体に属する存在であり、共同体を維持するための秩序である。

④．共同体の構成員には、構成員として公共道徳を守るべき責任と義務がある。自分勝手な行動は許されない。

⑤．人には仏性が備わっており、倫理的行動をとるように予めセットされている。

⑥．道徳的であることが喜びに通じるため。

⑦．人は幸せに生きることを望み、不快なことをしたくない、人を殺して楽しい人はいないという前提で共同体に設けられたルール。

⑧．人は大切な存在であり、大切な人を傷つけてはいけない。

⑨．異なる共同体間でも人を殺してはならないという共通の道徳（＝倫理）がある。しかし、共同体間で戦争が起きた場合は、敵国の兵卒を殺しても罪にならない。道徳を超える論理がある場合があるがこれは例外である。

⑩．生物の種としての永続的な発展のためには、共通のルールが必要となる。このルールの一つが道徳である。

⑪．道徳は時代や環境変化の 影響を受けるが、どのような時代と環境変化があっても共同体において不変の原理がある。それが、根源的な道徳であり、殺人禁止はこの普遍的な価値である。

⑫．諸行無常というが、無常でない普遍のものがある。それが、普遍的基準であり、その一つの例が殺人禁止という道徳である。

⑬．戦争状態で敵国の兵卒の殺人は、国家から許された合法的行為であるがそれを否定する輩が出る。イエスや釈迦ある。この場合、イエスや釈迦は国家の方針を否定する秩序の破壊者として迫害されることになる。これは、道徳が変化したのではなく、一時的に殺人が正当化されたにに過ぎない。大義のための殺人は許されるなら、殺人犯が次の殺人を犯す前に殺すことは正当化できる。だが、殺人が道徳に反するという、普遍的な価値の変更には当たらない。

一方で、殺人を正当化する理由も考えてみたい。

①．戦争では、敵国の兵卒を殺すことは称賛される。

②．極悪人は犯罪をおかす前に殺してもよい。

③．自分は殺されてもよいと思っているので、人を殺して何がいけないのか。

④．刑法で死刑制度がある。（極悪犯は、国が殺すことを認めている）

⑤．歴史上の偉人は、多量殺人者の側面をもつ。大量殺人がいいなら、1人２人殺してもかまわないのではないか。

⑥．なぜ殺人がいけないのか分からない。誰も説明してくれない。なぜいけないのかが証明されておらず、分からない以上、殺してもよいと考える。

⑦．大義のために行う殺人は許されている。

殺人がいけない主な理由は、次の３つと私は考える。

①．同じ共同体の中で、その共同体を永続的に維持していくために生まれたルール。

そのルールは自然発生的でもあり、人為的なものでもある。

②．社会等の変化に応じて変化するものもあるが、殺人はいかなる環境変化

時代変化があっても不変の普遍的な禁止事項である。

③．殺人をして楽しいと感じる人はいない。（いたらその人は精神異常者である）

４．まとめ

これまで考察してきたことは、以下のようにまとめられる。

（１）日本人のコンプライアンスの精神には、仏教の倫理が反映されている。

（２）仏教の倫理を実践し順守していくことがコンプライアンスの向上につながっている。

（３）仏教の伝来以来１５００年の仏教徒としての歴史がバックグラウンドにある。

以上

＜参考文献＞

１．金岡秀友　「釈尊とその生涯」（大学教育社）

２．原田伸夫　「日本仏教の社会倫理」（岩波書店）

３．島園進　「源信　往生要集」（平凡社）

４．井上順孝　「宗教社会学のすすめ」（丸善）

５．阿満利麿　「仏教と日本人」（筑摩書房）

６．岩井宏實　「日本の神々と仏」（青春出版社）

７．山折哲雄　「ブッダの教え」（集英社）

８．中村元　「法華経」解説（小学館）

９．大隈和雄　「日本の文化をよみなおす」（吉川弘文館）

10.和辻哲郎　「人間の学としての倫理学」（岩波文庫）

11.友松圓諦　　「仏陀のおしえ」（講談社）

12. 友松圓諦　　「空海の人間学」（竹井出版）

13.島園進　　　「国家神道と日本人」(岩波新書)

14.末木文美土　「日本宗教史」（岩波新書）

15.島田裕巳　　「浄土真宗はなぜ日本でいちばん多いのか」（幻冬舎新書）

16.大角修　　　「お経の心」（東京美術）

17.金岡秀友　　「現代人の仏教」（人文書院）

18.ひろさちや　「すらすら読める正法眼蔵」（講談社）

19.山折哲雄　　「こころの作法」（中公新書）

20.森末伸行　　「ビジネスの法哲学」（昭和堂）

21．鎌田茂雄　　「正法眼蔵随聞記講話」　講談社

22．堀内一史　　「アメリカと宗教」　　　中公新書

23．山折哲雄　　「暮らしのなかの祈り」　岩波書店

24．関根清三　　「倫理の探索」　　　　　中公新書

25．小泉義之　　「倫理学」　　　　　　　人文書院

26．今成元昭訳　「方丈記」　　　　　　　旺文社

27．武光誠　　　「知っておきたい日本の神道」角川ソフィア文庫

28．品川哲彦　　「倫理学の話」　　　　　ナカニシヤ書店

29．内藤孝弘他　「図説お経の本」　　　　洋泉社

30．石田瑞麿　　「教行信証入門」　講談社

31．奥村宏　　　「トップの暴走はなぜ止められないか」　東洋経済新報社

32．玄侑宗久　　「しあわせる力」　角川マガジンズ

33．佐藤俊明　　「心に残る禅の名話」　大法輪閣

34．司馬遼太郎、ドナルド・キーン対談　「日本人と日本文化」

35．樋口晴彦　　「なぜ企業は不祥事を繰り返すのか」　日刊工業新聞社

36．山折哲雄　　「神と仏」　講談社現代新書

37．司馬遼太郎・山折哲雄対談「日本とは何か」　日本放送協会出版

38．渡辺宝陽　「お経　日蓮宗」　講談社

39．山折哲雄　「霊と肉」　講談社

40.　ジョン・ミクルスウェイト他　「株式会社」ランダムハウス講談社

41.　梅原猛　「親鸞「四つの謎」を解く」新潮社